日本社会心理学会会報

190号

発行　日本社会心理学会　http://www.socialpsychology.jp/
編集・制作　池田謙一
113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1　東京大学大学院人文社会系研究科　池田研究室

2011年5月25日

第 55 回公開シンポジウム
「消費の病理：逸脱的消費者行動の現状に迫る」へのお誘い

●今号の主な内容
【2 面】第 26 期役員の紹介
【5 面】第 26 期役員選挙の結果
【6 面】第 26 期常任理事会・各委員会の体制
【7 面】第 25 期常任理事の離任の挨拶
【9 面】新入会者名簿など

モノの購入やサービスの利用は、私たちの日常に大きな楽しみをもたらしてくれます。しかしモノやサービスは、それらに依存するがあまり借金を繰り返したり、それらが原因で争いが生じたりというように、必ずしも好ましい結果をもたらすばかりではありません。こうした購買や消費の結果が、個人や社会に否定的結果をもたらす消費者行動のことを「逸脱的消費者行動」といいます。今回のシンポジウムでは、この逸脱的消費者行動に焦点を当て、特に消費行為への依存や過剰な苦情行動といった病理的側面に見識のある先生方にご登壇頂くこととなりました。ご登壇者には、各領域の研究成果をご披露頂くと共に、具体的な事例や現場で生じている諸問題などもご紹介頂く予定です。オーディエンスの方々との活発な議論を通して、逸脱的消費者行動における社会心理学的研究の意義や可能性について模索できればと考えております。

《プログラム》
日時：2011 年 6 月 18 日(土)
13 時～17 時
会場：関西大学千里山キャンパス第 3 学舎ソシオ AV 大ホール（D101 教室）
(http://www.kansai-u.ac.jp/global/guide/mapsenri.html)
登壇者（発表順）
神村栄一（新潟大学人文社会・教育科学系准教授）「**ギャンブル依存支援から見えた心理**」
池内裕美（関西大学社会学部教授）「**モンスター化する消費者たち**」
廣中直行（NTT コミュニケーション科学基礎研究所人間情報研究部研究員）「**消費は快楽か？情動と意思決定から『逸脱』を考える**」
指定討論者：秋山　学（神戸学院大学人文学部人間心理学科教授）
司会：唐沢　穣（名古屋大学大学院環境学研究科・心理学講座教授）
企画：唐沢　穣（名古屋大学）、池内裕美（関西大学）

《企画趣旨》
消費者行動は、非常に日常的な行動であるため、1 世紀近くも前から心理学的な関心が持たれてきた。しかし、関心の大半は購買行動や意思決定過程に向けられてきたため、研究の偏りが以前から指摘されている。特に近年は、より広範な視点から「消費」そのものを捉えることの必要性が唱えられ、従来は扱われなかった新たな問題にも目が向けられつつある。その一つとして挙げられるのが、まさに「逸脱的消費者行動」である。

「逸脱的消費者行動」(deviant consumer behavior)とは、一言でいうと消費の病理的側面であるが、具体的には「日常の消費者行動とは異なり、購買や消費（使用、所有）の結果が個人的、社会的に直接的な否定的結果をもたらす消費者行動」といえる。たとえばアルコールやギャンブルに対する依存的行動や、買物自体に対する依存、強迫的にモノを溜め込む行為、常軌を逸した苦情行動、さらには窃盗や詐欺といった消費にまつわる犯罪行為などが一例として挙げられる。また最近では、東日本大震災の直後にみられた買い占め行動や、過剰なまでの消費の自粛なども、一種の消費の逸脱といえるであろう。このように逸脱的消費者行動は、現代社会が引き起こした消費者問題であると同時に、極めて心理的な問題ともいえる。そこで本シンポジウムでは、こうした逸脱的消費者行動の現状に迫り、心理学がその予防や対策においてどのような貢献ができるのかを考えていきたい。

今回は、近年特に注目を浴びている「依存」や「過剰な苦情行動」の諸問題に焦点を当て、各方面に見識ある先生方に話題を提供して頂く。まず、新潟大学の神村栄一先生より、臨床心理学の観点からギャンブル依存の現状や取り組み、治療方法などについてお話を頂く。次に、関西大学の池内裕美先生より、消費者の苦情行動が生じる心理的・社会的背景や対応者の苦悩などについて、具体例も交えながらご紹介頂く。最後に、NTT コミュニケーション科学基礎研究所の廣中直行先生より、精神薬理学の観点から快楽的消費の持つ依存性や嗜好性についてお話を頂く。そして、指定討論者として神戸学院大学の秋山学先生をむかえ、逸脱的消費者行動研究の現状と今後について、総括的な議論を頂戴する。

（唐沢　穣・池内裕美）

第26期会長と常任理事の紹介

会長就任あいさつ
もっと社会へ

安藤清志

このたびの役員選挙で再選され、引き続き2年間会長を務めさせていただくことになりました。2年前の役員選挙後の会報では、第50回大会（大阪大学）がその年に開催される予定になっていたことから、ご挨拶の冒頭で「これまでの歩みを振り返り学会の将来の方向性を考える重要な時期に会長の任に就くことになり…今期の役員の協力を得ながら、将来のさらなる発展への足がかりになるような運営を目指したいと思います。」と記しました。以来2年間、学会の社会貢献の進展を主軸に、広報活動、年次大会運営、若手研究者支援、アジア諸国との連携などに取り組んできました。「自己点検評価」の結果は必ずしも満足のいくものではありませんが、方向としては「新たな一歩」の道筋を少しはつけることができたように思います。

これからの2年間は、当然のことながら、この歩みをさらに押し進めようと考えていますが、役員選挙の手続きが進行している時期に、今では東日本大震災と呼ばれるようになった未曾有の大災害が発生しました。前回の会報で述べましたように、この機会に私たちは個人として自らの研究活動を見直すだけでなく、学会という組織を通じてどのように社会に貢献するか、改めて考える必要があります。私には、大震災は本学会が50回記念大会という区切りを過ぎて新たに踏み出した歩みを、どの方向に、どれくらいの歩幅で歩むかを考えるべきであることを迫っているように思えます。現在の本学会の活動を考えると、方向性については社会への貢献を軸にすることに変わりありませんが、個人的には、私たちはこれまで以上に、「もっと社会へ」目を向けてこれらの活動を実践していく必要があると感じています。

広報については、災害後、広報委員会がいち早く災害関連リンク集を立ち上げ、現在も着々と更新されています。短期間にこのような形を作り上げて情報提供を行った若手・中堅の会員の力量には目を見張るものがありますし、他学会からも高く評価されています。このような活動がいつでもスムースに行えるように、普段からさまざまな社会問題に目を向けて心理学の知識と関連づけ、役立つ情報として提供する方法も含めて検討を加えておくことが必要です。海外の団体との関係を密にしておくことも大切です。近年、公益社団法人となった日本心理学会が韓国心理学会やオーストラリア心理学会と協力協定を結ぶなど、次第に諸外国との交流が活発になってきています。本学会の場合、会員が個人として、あるいは大学の組織を通じて海外の研究者と共同で活動することはあっても、学会を通じた活動は必ずしも活発ではありません。小回りがきかないという難点はあるかもしれませんが、学会という組織を利用した活動のほうが、社会に対して大きなインパクトを与えることもあります。また、ふだんから交流を密にしておくことで、災害などが発生したときに相互に援助を提供できるような道筋を作っておくことにもなります。

今期の役員の先生方をはじめ、若手の会員にもさまざまな形で学会運営に参加していただき、他の学会からも注目されるような学会活動を展開できればと思っております。2年間、どうぞよろしくお願いいたします。

（あんどうきよし・東洋大学）

常任理事就任あいさつ

事務局担当・今井芳昭

この度、26期事務局長を担当することになりました今井芳昭でございます。当学会役員選挙規程第8条第2項により、安藤清志会長からの推薦の後、理事の信任投票の結果に基づいて引き受けさせていただきました。今まで2年間、ご尽力くださった北村英哉先生の後任となります。

現在のところ、学会事務局の仕事は以下のようなことであると理解しております。すなわち、(a)入退会希望者の受付とそれに伴う常任理事会へのメールによる審議依頼、および、会員数の把握、(b)年1回大会時に開催される総会や2カ月に1回開催される常任理事会における議事案の作成、そして、(c)理事会への審議依頼です。

会員数については、大会発表とも関連して、3〜4月に入会希望が多くあり、また、退会希望者も数名います。現在は、2011年3月31日現在で一般会員数が1,337人、院生会員数が433人、合計1,770人となっています。このうち、院生会員が全体の24.5%を占めていて、若い力が比較的多いのではないかと思います。ただ、事務局サイドから会費納入率を見ますと、一般会員が91.9%、院生会員が77.6%となっています。また、残念ながら2年間連続して会費納入がなかった場合には、自然退会ということになってしまいますのでご注意ください。

総会で審議される議事案は、前年度の決算、翌年度の予算、その監査の他に、種々の規程の改訂があります。例えば、昨年度の総会における審議結果に基づいて、今年度からは、大会論文集の発表原稿が2頁から1頁に変更されました。常任理事会では、そうした事項の他に、各種受賞者の選考、名誉会員の推戴、（役員選挙が実施される年度では）役員選挙の実施方法といった事項について原案を作成し、審議しています。

なお、常任理事会の議事録につきましては、今まで会報で会員の皆様にお知らせしてきましたが、公的記録としての意味も含め、今年度から『社会心理学研究』に彙報として掲載されます（議事録は、当学会のサイト会員ページにもこれまでと同様に掲載されます）。それに伴い、本会報は学会サイトの会員ページから一般の閲覧が可能なページに移されることになります。

理事会を構成する理事は、全部で28名です（役員選挙規程第一条）。先の1月に行われた役員選挙においては、その内の半数が改選され（同第5条第5項）、新たに全国理事7名、地方理事8名が選出されました。今回の投票率は、前回の21.0%より高い25.7%でしたが、四分の一の会員の意見しか反映されていないとも言えます。引き続き投票率を上げていくこと（多分に社会心理学的な課題ですが…）が一つの課題であると言えます。総会前に開催される理事会以外は、主にメール会議を通じて、各種委員の承認、受賞者の承認、推戴者の承認などの審議が行われています。

学会の運営にあたり、こうした種々の作業があることを、今回、改めて知ることになりました。これらの作業を行うにあたり、到底、私一人では対応しきれず、国際文献印刷社の古川佳奈さん、そして、昨年度から引き続いて事務局幹事となってくださる、東洋大学大学院の結

城裕也さんのお力も借りています。任期2年の間、当学会の運営が円滑に進み、さらに発展していくよう努力する所存でございますので、会員皆様のご協力（事務局の立場からは、まず、会費の納入）をよろしくお願い申し上げます。

（いまいよしあき・慶応大学）

編集担当・唐沢穣

『社会心理学研究』の編集委員長および編集業務全般を担当することになりました。ただでさえ肩凝りの悪癖があるというのに、今後2年間の重責のため早くもそのあたりの部位に不穏な硬直を覚えています。微力ながら、当誌の発展のために鋭意努力していきたいと思っております。幸い副編集委員長は、ご経験豊富な下斗米淳先生（専修大学）に無理を言って引き受けていただくことになりました。他の優れた編集委員の先生方をはじめ、編集幹事の竹橋洋毅氏（名古屋大学）とも力を合わせて、日本の社会心理学研究の水準の高さを例証できるような雑誌にしていきたいと思っています。

前任者である釘原先生をはじめ編集委員の皆さんのご努力により、審査期間、そして投稿から掲載までの期間は確実に短くなっています。会員の皆さん、『社会心理学研究』はご自身の研究成果をいち早く公表していただくのに格好の場ですよ。ぜひ活用して下さい！

今期の編集委員会も、投稿される論文の幅広い領域に対応できるよう、自ら優れた研究活動を続けておられる先生方で構成されています。ベテランの先生から脂の乗り切った年代の皆さん、そして気鋭の若手の面々にも加わっていただいています（どなたがどの分類にあたるかは自己申告にお任せしましょう）。ご存じのように、当誌では主査が匿名でなく顕名で審査を行うため、この学会の編集委員を引き受けるには、かなりの責任感と覚悟を必要とします。そうした各委員の意気を、どうか投稿者の皆さんにも感じ取っていただけるようにというのが、私の願いです。

論文の執筆と審査のプロセスは、投稿者の皆さんと主査・副査を含めた審査者との共同作業です。査読の作業は、ある意味で最も報われない仕事の一つです。何の報酬も得られず、業績主義に傾くこのご時世に自分の業績が増えるわけでもないのに、多くの時間と労力を投入し、本心では言いたくもない苦言を時に呈しながら審査に当たってくださる同業者のおかげで、今日もまた貴重な研究成果が「私たちの」資産として生み出されていきます。そうした責任意識に基づく編集委員ならびに査読者の皆さんの労苦に、先回りしてお礼を申し上げるとともに、審査期間短縮のため、より一層のご協力を併せてお願いします。投稿者の皆さんにも、こうした審査者の犠牲的精神をご理解いただき、迅速な改稿等のご対応をいただくようお願いします。いくら選任された編集委員といえども、常に完璧な知識と理解に基づく審査を期待されてもそれは難しいかもしれません。大学院生の指導教員であっても、「完璧」は無理ですよね。むしろ、やや離れた観点を持つ読者にも理解が可能な議論を構築していただくことが、ご自身の論文のブラッシュアップにつながることもあるでしょう。先に「共同作業」と申し上げたのには、こうした意味も含めたつもりです。

他誌では見られないような面白いアイディア、そして説得力のある実証的根拠と議論とが込められた論文を、一点でも多く世に問うていくための生産的な作業を、投稿者と審査者の間で行っていただけるよう、私だけでなく編集委員会全体で環境づくりをしていきたいと思っています。雑誌の発行に関わる全ての皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

（からさわみのる・名古屋大学）

学会活動担当・遠藤由美

学会活動部門を担当させていただくことになりました遠藤です。

社会心理学会の活動は多岐に渡りますが、前任者の唐沢穣先生から、公開シンポジウムの開催と若手研究奨励賞の選考が学会活動担当者の重要な任務だとの引き継ぎをいただきました。会長の安藤先生が社会への貢献と若手研究者の育成を抱負として掲げられていることもあり、これらの活動が益々発展するよう微力ながら力を尽くしたいと思います。

若手研究奨励賞は近年会員の間で認知度が高まり、うれしいことに応募者が次第に増えてきております。しかし、この制度が有効に機能するためには、応募締め切り時期（＝ひいては受賞者決定時期）あるいは応募用紙の様式（＝選考のための情報）など、いくつかの点について見直してもよい時期が来ているかもしれません。受賞経験者、これから応募しようと考えている方などご意見がありましたら、お聞かせいただければ幸甚です。

公開シンポジウムの開催は、今年55回を数えるまでになりました。この会報にもご案内を掲載いたしましたが、今年度は「消費の病理―逸脱的消費者行動の現状に迫る」というタイトルで開催が予定されております。一般の方々にも関心が高いテーマなので、参加者・聴衆が相互に学びよい刺激を与えあう機会となるように、準備を進めてまいります。また来年度以降につきましては、開催地およびテーマや開催のあり方など広くご意見やご要望をいただきながら早めに決定したいと考えております。

学会活動はこれら公開講座と若手研究奨励賞の2つに限定されているわけではありません。一方には予算制約という厚い壁がありますが、会員が知恵を出しあえば、研究を活性化しそれを社会に還元していくような、しかしあまりお金を使わなくて済む、何か新しい活動を考え出せるのではないかと思っています。日本社会心理学会は会員数約1800にのぼる大きな学会ですが、一人一人の力が集まると、本当に大きな未来へと向かう流れになるのではないでしょうか。今後これからの学会のあり方・活動をどうすれば高めて行くことができるか、みなさまの積極的なご議論ご意見と活動へのご参加をお願いいたします。

（えんどうゆみ・関西大学）

渉外担当・唐沢かおり

第26期の常任理事として、渉外を担当させていただくことになりました。渉外担当は、今から6年前に、第23期常任理事として担当いたしましたが、今回、心も新たに、気を引き締めて仕事に当たってまいりたいと考えております。さっそく、前任者の外山みどり先生から仕事を引継ぎ、大学院生海外学会発表支援制度、及び、国際学会シンポジウム企画補助金制度の支援対象者選考作業に入っております。6月中には、応募者の方々に選考結果をご報告できるよう、審査者の先生方とともに、厳正かつ迅速に審査を行ってまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

渉外担当の重要な課題のひとつは、国際交流の促進ですが、上記2制度もその

ためのものです。若手研究者の方々の国際レベルで活躍を支える制度として、また、日本の社会心理学の研究成果を世界に向けて発信するための制度として活用されてきたものですが、そのあり方については、そのときの現状に見合った、有意義な国際交流の促進につながるよう、議論を継続的に行っていくことが必要であると考えています。学会の制度は、会員の皆様に活用いただき、成果が活発な研究活動の推進に役立ってこそ、その存在意義があるといえるでしょう。したがって、積極的に応募していただくための広報や制度の整備、さらには、この制度を活用した国際交流の成果を、単に支援対象となった方だけではなく、より広く、学会全体に還元していくための方法などについて、議論を深めていくことが求められます。より活発な交流に資するような制度となるべく、その整備と運営にあたる所存です。

また、これら支援制度以外に、日本心理学諸学会連合への協力、他学会との交流の促進といった課題を引き継いでおります。日本心理学諸学会連合に関しては、心理学検定をはじめとする諸事業への協力という継続的課題とともに、国資格に関わる議論がございます。社会心理学会として望ましいと考える方向について、会員の皆様からのご意見をいただきつつ、心理学への正しい理解の促進、さらには心理学が社会で果たすべき役割などの論点も踏まえたうえで、議論に関わっていきたいと考えています。他学会との交流については、社会心理学の持つ学際的側面の展開を、学会としていかにサポートするかが課題かと存じます。すでに多くの会員の皆様が学際的な研究に携わり、成果をあげておられるという現状がございますので、それらをより「見えやすい形」としてアピールし、社会心理学者の活動の場が広がるような仕組みを考えていくことができればと思います。

以上、当面の渉外関連の課題となることを述べましたが、これらの活動は、本当に意味のある研究や情報発信とは何かという視点を見失うことなく、日本社会心理学会と、他領域、他学会、そして社会との関わりを考えていくことが基盤となります。これからの2年間、仕事をしていくに当たりまして、ぜひ皆様方から多くのご意見をいただき、それに基づいて努力してまいりたいと存じます。よろしくお願いいたします。

（からさわかおり・東京大学）

大会運営担当・堀毛一也

まずは、このたびの震災に関し、皆様より頂戴したお見舞い、励ましのお言葉につきまして、紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。また、これも私事で恐縮ですが、このたび13年間勤務いたしました岩手大学・人文社会科学部を退職し、東洋大学・社会学部に異動いたしました。残り僅かな年月ですが、精一杯研究・教育に務める所存です。ひきつづきよろしくご指導賜りますようお願い申し上げます。

震災のため、新任地への引っ越しもままならず、また新幹線が不通で、盛岡と東京の行き来も不便な中、ストレスフルな生活を送っておりました。そのような折りに、常任理事選挙当選の連絡をいただき、よほど辞退しようかとも考えたのですが、安藤会長の隣室に居座らせていただく身としてはそのようなわけにもいかず(⁉)、僭越ながらお役目引き受けさせていただいた次第です。東洋大にお越しのさいは、どうぞお声がけください。

幸いなことに、頂いた「大会運営担当」という役割に関しては、前任者の村田先生がさまざまな準備や、規定・細則の整備、論文集の1p化の提案等を行ってくださったので、私の出番はあまりなさそうで安堵しています。とはいえ、名古屋大学（第52回大会：吉田俊和委員長）、筑波大学（第53回大会：吉田富二雄委員長）に続く開催校はまだ決まっておりません。運営委員会での論議に基づき、先生方にお願いにあがることと思いますが、是非前向きにご検討・ご協力賜れば幸いに存じます。また、学会によるシンポジウムの企画や運営の検討等も進めさせていただく予定です。今年度は、広報委員会からのお申し出により、共同企画で震災関連のシンポジウムを開催させていただくことになりました。多数の皆様にご参加いただければ幸いに存じます。

また、大会運営に関連する、さまざまなご要望やご助言等ございましたら、是非委員会宛ご一報いただければ有難く存じます。大会運営委員は、田中優先生(大妻女子大学：理事)、小城英子先生(聖心女子大学)、宮本聡介先生（明治学院大学)、が残り2年の任期、さらに、52回大会準備委員会から北折充隆先生にも今年度末までの委員として加わっていただいております。わたし自身の任期も2年です。次期につながる残り2名の委員としては、村本由紀子先生（横浜国立大学：理事)、福島治先生（新潟大学）にご参加いただきました。また幹事を小

26期のメンバー
前列左から、唐沢穣、今井、安藤、唐沢かおり、遠藤
後列左から、池田、堀毛、結城、古川

25期のメンバー
前列左から、川浦、北村、安藤、釘原、外山
後列左から、唐沢穣、村田、結城

林麻衣さん（東洋大学大学院生）にお願いしました。ご要望等は、これらの先生方に、直接お伝えいただいても結構です。微力ながら、できるだけ多くの皆様にご満足いただけるような大会運営を目指し、準備委員会への支援・協力等進めていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（ほりけかずや・東洋大学）

広報担当・池田謙一

第 26 期の常任理事として広報委員会を担当することとなりました池田謙一です。

じつは第 19 期の 1997-1998 年度に会報・WWW・将来計画担当の常任理事を務めさせていただいており、それから 7 期ぶりに同じ分野の担当となったしだいです。今期は会報と学会ホームページのみならず、日本社会心理学会ニュースや、先頃立ち上がった東日本大震災用の特設ページも責任の範囲内であり、広報委員会までもが組織されている形になっていることに今昔の感が否めません。前回は社会心理学会 HP を自作で立ち上げたことを思うと感慨がありますが、それに浸る余裕はなさそうです。既に経験し始めていますが、今般の広報業務の流れはとても速いです。

ご存じの通り、前期は川浦康至委員長を中心に活発に活動されてきました。とくに任期終了直前の東日本大震災を受けて立ち上げた特設ページの活動は年度が替わっても充実の度を増していますが、これも含めて新委員会は活動を受け継ぎます。退任された委員の森津太子さんと藤島喜嗣さん、幹事の藤桂さんには、深く御礼申し上げます。また、4 年任期の後半として三浦麻子さんと五十嵐祐さんが留任されますが、前期の熱気を引き継いでさらによろしくお願い申し上げます。頼りにしております。

そして新しい委員には、広報委員会の規定に基づきお二人の委員に就任をしていただきました。宮本聡介さん（明治学院大学）、小林哲郎さん（国立情報学研究所）です。幹事には范知善（ボム・ジソン）さん（東京大学大学院博士課程）をお願いしております。どうぞこれからよろしくお願い申し上げます。

このような陣容でこれから 2 年間を担当させていただきますが、会員の皆様に委員会としての姿勢をお約束させていただきます。

広報委員会の任務は基本的には「内向き」と「外向き」があります。

「内向き」の任務は会員相互、また学会執行部と会員の相互の架け橋となり、会員であることの研究上のメリットを得ていただくことに他なりません。そのための学会のメーリングリストであり、ホームページであり、会報であることを肝に銘じたいと思います。これら複数のメディアを最適化して有用性、タイムリーさ、可視性、メリハリを追求したい、とお約束します。

「外向き」には、学会の活動を広く伝えることはもちろんですが、片やアカデミックな研究を片や「社会」に対する貢献を進める橋渡し役として機能することが広報委員会の務めだと認識しております。安藤会長の所信表明にありますように、後者の役割の拡大が今期の方向性であればなおのこと、外からよく耳を傾けられ、よく注視していただけるだけの内容を発信するための広報に邁進したい、とお約束します。前期広報委員会が力を傾けていらした学会 HP のリニューアルが近々実現いたしますので、そのことにも積極的に取り組みます。

広報は耳が大切、ぜひ皆様のお声をお寄せ下さい。

（いけだけんいち・東京大学）

第 26 期役員選挙の結果報告

田中堅一郎

今回、第 26 期の会長（任期 2 年）および理事、監事（任期 4 年）の役員選挙を実施した。今回の選挙では選挙規定が改訂され、前回第 25 期役員選挙と同様に、オンラインによる投票と従来の書面投票を併用することとなった。昨年 12 月に選挙人名簿を確定し、本年 1 月 6 日より書面による投票およびオンライン投票を開始し、同 30 日に締め切った。

投票締切後、2 月 16 日、東洋大学において選挙管理委員会で開票作業を実施した。有権者数 1465、投票数は 376、投票率は 25.7％であった。地方区別の投票数は表 1 の通りである。なお、書面による投票の申請はなく、全投票がオンライン投票であった。

前回から採用されたオンライン投票は、選挙にかかる経費・労力がかなりの節約となったが、表 1 のように、前回の投票率(21％)は上回ったものの、今回の投票率は必ずしも十分な値には至らなかった。この点について、案内・宣伝など反省しなければならない。また、今回は理事選挙投票期間中に会員 2 名の氏名が名簿から漏れていたこと、その原因が昨年 4 月から当該 2 名の会員が抽出されないシステム上のトラブルがあったためであることが明らかになった。こうした事態はあってはならないことであり、選挙管理委員会として今後の対応に課題を残すこととなった。さらに、3 名連記に 2 名以下しか記入されていないため欠損値（「白票」）が多くなった。この点についても、投票者に事前の注意を喚起する必要があるかもしれない。

会長、理事、監事選挙の結果は表 2 から表 8 の通りで、当選者全員が就任を承諾した。会長には安藤清志氏が再任された（いずれの選挙でも、表中の得票数が同じ場合の順位は抽選により決定した）。

以上の手続きにより、第 26 期の会長、理事、監事が確定したので、常任理事選出の手続きを規定にしたがって実施した。まず、安藤新会長が、事務局担当常任理事に今井芳昭氏、編集担当常任理事に唐沢　穣氏を推薦、理事による信任投票の結果、信任された。

その後、理事の互選による常任理事（任期 2 年）の選挙を行った。常任理事選挙については前回から電子メールを用いている。3 月 31 日に株式会社国際文献印刷の会議室において開票を行った。得票数では村田光二氏、池田謙一氏、遠藤由美氏、堀毛一也氏が当選となったが、村田光二氏から辞退の申し出があったため、次点であった唐沢かおり氏が繰り上げ当選となった。結果は表 9 の通り（表中の得票数が同じ場合の順位は抽選により決定した）で、当選者 4 名名の常任理事が決定した。

以上のように、今期は 6 名が常任理事に就任することになった。

（選挙管理委員会委員：礒部智加衣、工藤恵理子、下斗米　淳、松井　豊）

（たなかけんいちろう・日本大学）

表 1　第 26 期役員選挙投票数

	有権者数	投票数	投票率(%)
北海道・東北地区	111	33	29.70%
関東地区	705	168	23.80%
中部・近畿地区	483	125	25.90%
中国・四国・九州・沖縄地区	156	48	30.80%
海外	10	2	20.00%
全体	1465	376	25.70%

表 2　第 26 期役員選挙開票結果（会長）

氏名	得票数	順位	当選者
安藤清志	170	1	○
池田謙一	23	2	次点
大渕憲一	20	3	次々点
村田光二	20	3	
小計		233	
19 票以下省略		134	
白票		9	
合計		376	

注：次々点は抽選にて決定

表 3　第 26 期役員選挙開票結果（全国区理事）

氏名	得票数	順位	当選者
池田謙一	66	1	○
村本由紀子	49	2	○
唐沢かおり	43	3	○
遠藤由美	31	4	○
大渕憲一	20	5	○
箱井英寿	16	6	○
安藤玲子	14	7	○
西田公昭	14	7	次点
高比良美詠子	14	7	次々点
岡　　隆	13	10	
三浦麻子	12	11	
小計		292	
10 票以下省略		370	
白票		90	
合計		752	

注 1：同一 7 位の当選、次点、次々点は抽選にて決定
注 2：2 名連記すべて白票を投じた有権者は 34 名

表 4　第 26 期役員選挙開票結果（地方区理事）その 1

北海道・東北地方区			
氏名	得票数	順位	当選者
高橋伸幸	8	1	○
大渕憲一	4	2	全国区に当選
今川民雄	4	2	次点
今在慶一朗	3	4	次々点
辻本昌弘	2	5	
小計		21	
1 票省略		9	
白票		3	
合計		33	

表 5　第 26 期役員選挙開票結果（地方区理事）その 2

関東地方区			
氏名	得票数	順位	当選者
岡　　隆	23	1	○
今井芳昭	19	2	○
森　津太子	18	3	○
宮本聡介	17	4	次点
上瀬由美子	17	4	次々点
池田謙一	15	6	
山田一成	12	7	
相川　充	12	7	
小計		133	
11 票以下省略		278	
白票		93	
合計		504	

注 1：次点と次々点は抽選にて決定
注 2：3 名連記すべて白票を投じた有権者は 18 名

表 6　第 26 期役員選挙開票結果（地方区理事）その 3

関西・中部地方区			
氏名	得票数	順位	当選者
林　直保子	35	1	○
松浦　均	31	2	○
阿部晋吾	14	3	次点
太田　仁	12	4	次々点
唐沢かおり	9	5	
西田公昭	8	6	
小計		109	
7 票以下省略		115	
白票		26	
合計		250	

注：2 名連記すべて白票を投じた有権者は 10 名

表 7　第 26 期役員選挙開票結果（地方区理事）その 4

中国・四国・九州・沖縄地方区			
氏名	得票数	順位	当選者
木村堅一	13	1	○
浦　光博	6	2	次点
山口裕幸	5	3	次々点
笹山郁生	3	4	
坂田桐子	3	4	
小杉考司	3	4	
小計		33	
1 票省略		13	
白票		2	
合計		48	

表 8　第 26 期役員選挙開票結果（監事）

氏名	得票数	順位	当選者
釘原直樹	45	1	○
本間道子	17	2	次点
松本　敦	15	3	次々点
山岸俊男	14	4	
亀田達也	10	5	
小計		101	
9 票以下省略		221	
白票		54	
合計		376	

表 9　第 26 期常任理事選挙開票結果

氏名	得票数	順位	当選者
村田光二	10	1	辞退
池田謙一	7	2	○
遠藤由美	7	2	○
堀毛一也	6	4	○
唐沢かおり	6	4	○（次点）
竹村和久	5	6	次々点
小計		41	
4 票以下省略		34	
合計		75	

注：同一 4 位の当選、次点は抽選にて決定

第 26 期常任理事会・各委員会の体制

日本社会心理学会 26 期の常任理事会、各委員会の体制を各担当の常任理事からご紹介いただきましたが、下記にまとめておきます（2011 年 5 月 11 日現在）。

第 26 期常任理事会・担当

	新　　旧
会長	安藤清志（安藤清志）
事務局担当	今井芳昭（北村英哉）
編集担当	唐沢　穣（釘原直樹）
大会運営担当	堀毛一也（村田光二）
広報担当	池田謙一（川浦康至）
学会活動担当	遠藤由美（唐沢　穣）
渉外担当	唐沢かおり（外山みどり）
学会事務局幹事	結城裕也（東洋大学大学院）

1.　編集委員（○印は理事）

編集委員長　○唐沢　穣（名古屋大学）
副編集委員長　○下斗米淳（専修大学）
継続メンバー：
　有馬淑子（京都学園大学）
　今在慶一朗（北海道教育大学）
　○岡　隆（日本大学）
　○角山　剛（東京国際大学）
　○工藤恵理子（東京女子大学）
　○竹村　和久（早稲田大学）
新メンバー：
　相川　充（東京学芸大学）
　大坪庸介（神戸大学）
　長谷川孝治（信州大学）
　○林　直保子（関西大学）
　広瀬幸雄（関西大学）
　藤原武弘（関西学院大学）
　○森　津太子（放送大学）
　安野智子（中央大学）
編集幹事：竹橋洋毅（名古屋大学・エコトピア科学研究所）

2.　広報委員

委員長：○池田謙一（東京大学）
継続メンバー：
　三浦麻子（関西学院大学）
　五十嵐祐（北海学園大学）
旧メンバー：
　藤島喜嗣（昭和女子大学）
　森津太子（放送大学）
新メンバー：
　宮本聡介（明治学院大学）
　小林哲郎（国立情報学研究所）
広報幹事：范知善（東京大学大学院）

3.　大会運営委員

委員長：○堀毛一也（東洋大学）
継続メンバー：
　○田中　優（大妻女子大学）
　宮本聡介（明治学院大学）
　小城英子（聖心女子大学）
　北折充隆（金城学院大学）
旧メンバー：
　樋口匡貴（広島大学）
　土肥伊都子（神戸松蔭女子学院大学）
新メンバー：
　○村本由紀子（横浜国立大学）
　福島　治（新潟大学）
大会運営幹事：小林麻衣（東洋大学大学院）

メール・ニュースの広告募集

日本社会心理学会メール・ニュースに掲載する広告を随時募集しております。掲載を希望される方は、日本社会心理学会事務局までご連絡ください。

E-mail: jssp-post@bunken.co.jp

掲載料：1 件（1 回あたり）1,000 円（後日事務局より請求書をお送りします。）

第 25 期の皆さん、2 年間の活動、ありがとうございました

25 期事務局担当・北村英哉

事務局を担当しておりました北村です。社会心理学会の事務局を担当してみて、改めて裏方仕事の大変さを感じました。これまで歴代お務めいただいていた先生方に頭が下がる思いです。わたしの場合は、反省点がかなり多く、皆様から感謝されるほどの仕事はできなかったなと思っております。

入退会、通信、理事の先生方への審議依頼、賞などの確認等々、日々コンスタントに流れていく業務を追いかけていくことが精一杯でして、前期から申し送られた賛助会員の皆様の要望をお聞きして、それを何らかの形で反映させるということもできませんでした。また、入会申込用紙もいくぶん改訂の余地があると思いますが、それも少し小手先的にいじっただけで終わってしまいました。

幸い、全体的な趨勢に助けられ、会員数は微増程度に維持されましたが、大学院生の会員の方の学生証確認なども満足できる割合には行っておりません。

また、予算についても実情に合わせて更に改善の余地があるように思いました。

新聞の物故欄を注意深く眺めたり、叙勲のリストを見たりなどの習慣からはもう解放された感じで、引き継ぎが終了した後、思ったよりもかなりホッとした心境になったのは、実際の仕事より以上に、常時ワーキング・メモリを消費するプレッシャーがあったのかなと振り返って思います。

名簿作成の不十分さ、そこで発生した選挙名簿におけるミスなど明白な反省点もあります。しかし、全般的にはパーソ心の方で一度事務局を務めていた経験から国際文献とのやりとりに慣れがあったこと、基本的な仕事の流れが見えていたこと、安藤会長がすばやく事務局的な対処についてもカバーして頂いたなど、そうでない場合よりも楽をさせて頂いたかと思います。ご支援頂きました会員の皆様、理事、常任理事の皆様ありがとうございました。今井先生よろしくお願いいたします。みなさま引き続きどうぞご支援お願いいたします。

（きたむらひでや・東洋大学）

25 期編集担当・釘原直樹

引き継ぎのために池田謙一先生の研究室に伺ったのがつい最近のようでもあり、遠い昔のようでもあります。緊張していたためか、地下鉄本郷三丁目駅の自動改札機の切符投入口に切符を入れたところ、東京の自動改札機は投入口の弁が閉じるのが速くて、指を挟まれてしまいました。血を流しながら研究室に行きました。出鼻をくじかれて、いささか暗い気持ちになりましたが、池田先生に心配していただき、また絆創膏までもらって、気持ちも前向きになりました。

この 2 年間、編集に関する多くの日々の業務がありました。また編集委員長としていつも気がかりだったのは、掲載論文が揃うかどうかということでした。時には編集委員の方々に、審査を急いでもらうようにお願いしたこともあります。迅速な審査を心がけ、審査員の先生方にもかなり努力をしてもらいました。いくつかの問題もありましたが、何とか 6 冊を発行することができました。年 3 冊（1 冊あたり 8 編の論文）を発行するためには、掲載可の割合を 50% としますと年 50 本ほどの投稿論文数が必要となります。現在はこれを少々下回っていますので会員の皆様の協力（質の高い論文の作成と積極的な投稿）を切望する次第です。

編集に関してこの 2 年間で変更した事項は 10 点ほどになりますが、その中で主要なものは第 1 に、社会心理学研究の投稿規程 5 の変更（以前の特別論文をモノグラフとして規程を明確にした）と論文の連名著者の資格要件の変更（連名者は会員でなくても投稿可能とした）です。このような改訂を通じて、多くの方々に投稿して頂けるように意図したのですが…。

編集に当たって多くの方々に協力して頂きました。匿名の審査者や編集委員の先生方、副編集委員長の沼崎誠先生、編集事務センターの高橋尚子さん、編集幹事の阿形亜子さんには特にお世話になりました。ありがとうございました。

（くぎはらなおき・大阪大学）

25 期学会活動担当・唐沢穣

伝統ある日本社会心理学会の常任理事を務めさせていただき、いろいろな経験をすることができました。不慣れなため

に失敗を重ねたにもかかわらず、会長をはじめ理事や会員の皆さんにカバーしていただいたおかげで、なんとか終えることができました。皆さまからいただいたサポートに対し心よりお礼申し上げます。

主な担当事項である公開シンポジウムでは、2009年に盛岡市で開催された「近代化の社会心理学」(企画：作道信介先生（弘前大学))、それから2010年・上智大学における「企業の社会的責任」(企画：山口裕幸先生（九州大学)・杉谷陽子先生（上智大学)）のいずれにおいても、私はほとんど何もしないまま、企画者の皆さま方のご尽力によって成功裏に終えることができました。お世話になりありがとうございました。今後も、専門的世界だけに閉じこもらず、社会心理学の成果を広く社会に還元できる学会活動が、よりいっそう進められていくよう願っています。そのさいの課題としては、たとえば学会大会が開催されにくい地域のニーズに応えることと、上に記した公開シンポジウムの使命とのバランスを、どうやって取っていくかといったことが挙げられるかもしれません。

次に若手研究者奨励賞の選考も重要な任務でした。この制度の前身である「奨励金」時代の、「少々型破りでもよいから将来性のある若手の研究を支援する」という精神と、学術的にレベルの高い研究計画を奨励するという目的は概ね一致するものの、時には細部で両立させることが難しい場合もあり、選考委員の先生方の頭をかなり悩ませたのも事実です。しかし委員の皆さんの慧眼により、優れた授賞者を出せたと思っています。受賞された皆さんはもちろん、惜しくも選に漏れた出願者の皆さんの中からも、明日の学界を背負って立つ人材が次々と育っていってくださることを願ってやみません。

今から思い返せば、もっと貢献できればよかったのにと悔やまれることばかりです。ただ常任理事会に出席していて思ったことは、組織全体としては、現在の社会心理学会は学術的にも財政的にも良好な状態にあるということです。言うまでもなくそれは、学会員お一人ひとりの資質と努力に負っています。このような時だからこそ、さらに欲張って、内向きにならずに他の学問領域の研究者たちと手を携えて、科学研究の進歩と社会問題の解決に貢献できる学会へと成長していきたいと思わされました。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

（からさわみのる・名古屋大学）

25期渉外担当・外山みどり

25期で渉外を担当致しました、学習院大学の外山です。常任理事も渉外の仕事も初めてでしたので、前任者の池上知子先生から丁寧な引き継ぎを受けたものの当初は不安な気持ちでしたが、何とか無事に任期を終えることができてほっとしております。以下に述べます諸制度の選考委員としてご協力頂いた方々をはじめ、お世話になりました多くの会員の皆様に御礼を申し上げます。

渉外担当の主な仕事は、国際的な研究活動促進のための二制度―大学院生海外学会発表支援制度と国際学会シンポジウム企画補助金制度―の募集と対象者の決定、および学会の代表として日本心理学諸学会連合の理事会に出席することです。大学院生海外発表支援は2004年にできた制度で、当初は応募が少なく、応募者全員が支援対象となった年度もあったほどでしたが、応募時点で発表の採択が決定していない場合でも応募できることが明記され、制度自体も広く知られるようになって、昨年度からは応募者が急増しました。国際学会シンポジウムの方は更に新しい制度で、やはり初期には応募が少なかったのですが、国内の学会、特に社会心理学会の大会当日に開かれる自主シンポやワークショップに外国人を招聘する場合にも適用できるよう規程の改定を行った結果、応募しやすい制度になったと思います。これらの制度が活用されて、さらに国際交流がさかんになりますことを祈っております。

常任理事会の仕事には、継続と変革の両面があると思います。通常の学会活動のルーティンを滞りなく実行すると同時に、新たな発展に向かって、現状を改革していくという課題があります。次期の常任理事会が、その課題に向かって進まれますよう期待しております。

（とやまみどり・学習院大学）

25期大会運営担当・村田光二

大会運営担当常任理事として2年間、次の仕事をしてまいりました。

まず、大会運営委員会を正式に組織化して、学会内に制度化しました。理事から田中優さん、当時の次期大会準備員会から樋口匡貴さん、これに小城英子、宮本聡介さん、土肥伊都子さんに加わってもらい、阪大での記念大会時から実質的に活動を開始できました。後には、今年度大会の準備委員会からも北折充隆さんに参加してもらいました。若い委員から多くのアイデアを提供してもらい、楽しく有意義な活動ができたと思います。ありがとうございました。半数の方には残っていただきますが、堀毛常任理事とともに、引き続きよろしくお願いします。

また、委員会の議論を通じて「年次大会運営に関する申し合わせ事項」を策定しました。まだまだ整備する必要のある項目が残っていますが、運営のガイドラインを明示して、大会主催者や関係者が考慮する点をまとめることができたと考えています。

他方で、大会準備の過程で、必要に応じて準備委員会の支援にあたりました。相談にできるだけのるようにしましたし、阪大大会でも広大大会でもシンポジウム開催の手伝いをしました。これらについてもご参加、ご協力していただいた方々に感謝申し上げます。

そして、何とか今年度と来年度の大会主催者を決めることができました。この点は他の常任理事の方、特に安藤会長の貢献が大ですが、大会運営委員会で議論して候補を探索したことがとても役に立ったと認識しています。

最後に、大会開催がほとんど無い地方の大学以外での開催についても検討してまいりましたが、この実現は将来に託したいと思います。

（むらたこうじ・一橋大学）

25期広報担当・川浦康至

この間、顔の見える学会をスローガンにかかげ、広報活動の拡充を図ってきました。思い返せば、2年前に広報委員会を発足させたのを皮切りに、メールニュース配信の機動化、公開シンポジウムのホームページでの詳細情報提供、大会シンポジウムの動画配信、会長コラムの新設（会報)、ツイッターでの発信、そして想定外の活動として東日本大震災緊急情報サイトを開設と、大小さまざまな活動に取り組みました。会報についても見直し、新年度から議事録を学会誌に

移すことにしました。基本情報として記録性を高めたかったからです。懸案事項のホームページのリニューアルでは、繰り返し訪れてもらえる、一般の人にも見てもらえる、この二点を主要目標として検討しました。画面構成を含め全体設計まで進みましたが、まだ作業がかなり残っています。なお検討過程で出されたアイデアの一部は既にホームページに反映させました。

広報委員会は「会員の研究に資する情報の交換と連絡」と「社会心理学の普及に必要な諸活動」に関する広報を効果的に遂行する目的で作られました。前者は今期でかなり改善が図られたものと自負しています。したがって今後は、後者にかかわる広報活動を推進する必要があると考えます。上記の緊急サイトはその嚆矢とも言えるものですが、一般の人あるいは、これから社会心理学を勉強したいと思っている人たちに向けた広報、またアジア諸国との交流を促すための広報がいっそう進むことを願っています。

最後に、この場を借りて以下の方々にお礼申し上げます。委員の森津太子さん、藤島喜嗣さん、三浦麻子さん、五十嵐祐さん（お二人は次期も継続）、幹事の藤桂さん。おかげで楽しく濃い2年間でした。

（かわうらやすゆき・東京経済大学）

会員異動

(～2011年5月13日)

■新入会員

《正会員》

・一般会員　石井健一（筑波大学システム情報工学研究科准教授）、内田遼介（大阪体育大学トレーニング科学センター職員）、片受　靖（立正大学心理学部准教授）、木村　裕（早稲田大学文学学術院文化構想学部現代人間論系教授）、桑原裕子（早稲田大学キャリアセンター・杉並区役所相談員）、郡司郁子（(独)日本原子力研究開発機構東海研究開発センター核燃料サイクル工学研究所リスクコミュニケーション室）、幸田達郎（文教大学人間科学部専任講師）、小錦藍子（宮城県職員技師）、佐伯昌彦（東京大学大学院法学政治学研究科助教）、佐藤潤美（東北大学文学部研究生）、志村ゆず（名城大学人間学部准教授）、高橋　徹（愛知みずほ大学人間科学部人間科学科助教）、白　晶（北海道大学大学院行動システム科学研究室大学院生）、米田祐介（立正大学人文科学研究所研究員）、山本陽一（筑波大学大学院ビジネス科学等支援室事務補佐員）、吉澤英里（青山学院大学教育人間学部心理学科助手）、邢　蓮姫（Wonkwang University（圓光大学、韓国）Teaching assistant）

・大学院生　秋山　豪（東京工業大学大学院社会理工学研究科）、足立知子（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）、安達菜穂子（広島修道大学大学院人文科学研究科）、安部健太（学習院大学大学院人文科学研究科）、池田安世（愛知学院大学大学院心身科学研究科）、池谷光司（東京大学大学院人文社会系研究科社会心理学研究室）、石崎香菜子（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）、伊藤言（東京大学大学院人文社会系研究科心理学研究室）、伊藤健彦（東京大学大学院人文社会系研究科社会心理学研究室）、稲葉美里（北海道大学大学院文学研究科社会心理学研究室）、植村友里（淑徳大学大学院総合福祉研究科）、遠藤(藤)寛子（筑波大学大学院人間総合科学研究科）、應治麻美（京都府立大学大学院公共政策学研究科社会心理学研究室）、大崎裕子（東京工業大学大学院社会理工学研究科）、大貫真友子（University of Southern California（南カリフォルニア大学）大学院社会心理学研究科）、大畑由佳（岡山大学大学院社会文化科学研究室）、菊池　健（上智大学大学院総合人間科学研究科認知心理学研究室）、北梶陽子（北海道大学大学院文学研究科行動システム科学研究室）、グエン・タン・トアン（名桜大学大学院国際文化学研究科）、小出　悠（淑徳大学大学院総合福祉研究科）、河嶋章生（関西大学大学院社会安全研究科）、佐藤浩輔（北海道大学大学院文学研究科社会心理学研究室）、佐藤有紀（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）、篠原由花（学習院大学大学院人文科学研究科）、島本健太郎（京都ノートルダム女子大学大学院人間文化学研究科）、白石彩乃（広島大学大学院教育学研究科社会心理学研究室）、曾　永宏（日本大学大学院芸術学研究科芸術専攻）、高沢佳司（名古屋大学大学院環境学研究科）、高橋京子（目白大学大学院心理学研究科）、高橋真知子（筑波大学大学院人間総合科学研究科）、高山美穂（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）、土屋裕希乃（青山学院大学大学院教育人間科学研究科心理学専攻）、鶴羽貴子（関西大学大学院心理学研究科）、寺口　司（大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学研究室）、照屋佳乃（広島大学大学院教育学研究科社会心理学研究室）、冨澤和香子（北星学園大学大学院社会福祉学研究科）、中井裕規（関西大学大学院心理学研究科）、永井暁行（中央大学大学院文学研究科）、中西裕希未（名古屋大学大学院教育発達科学研究室）、中俣友子（東北大学大学院文学研究科心理学研究室）、中村文彦（北海道大学大学院文学研究科社会心理学研究室）、中山　真（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）、中分　遥（上智大学大学院総合人間科学研究科社会心理学研究室）、波多野礼佳（北海道大学大学院文学研究科社会心理学研究室）、平山哲行（久留米大学大学院心理学研究科）、福田詩織（名古屋大学大学院教育発達科学研究科）、古川みどり（東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系認知行動科学大講座長谷川研究室）、松山早希（大阪大学大学院人間科学研究科対人社会心理学研究室）、萬関明子（大阪府立大学大学院人間社会学専攻人間科学専攻）、三浦亜利紗（北海道大学大学院文学研究科社会心理学研究室）、三田村徳美（東京都市大学大学院環境情報学研究科）、三ツ村美沙子（愛知学院大学大学院心身科学研究科）、箕浦有希久（関西学院大学大学院文学研究科）、森下雄輔（帝塚山大学大学院人文科学研究科）、八木彩乃（神戸大学大学院人文学研究科社会動態専攻心理学研究室）、安田崇子（慶應義塾大学大学院社会学研究科）、山川　樹（日本大学大学院文学研究科）、山脇望美（東北大学大学院文学研究科心理学研究室）、横山智哉（一橋大学大学院社会学研究科）、吉田正博（関西大学大学院心理学研究科）、金　恩京（関西大学大学院心理学研究科）、陳　婷婷（広島大学大学院総合科学研究科）、王　潔（慶應義塾大学大学院商学研究科）、胡　一逾（北海道大学大学院文学研究科行動システム講座）、鄭　珪熙（東京大学大学院人文社会学研究科社会心理学研究室）

■退会者

青柳壮助、生田倫子、伊藤禎彦、伊藤隆、宇治琢美、氏家　豊、牛田梨恵香、大槻一貴、岡林秀樹、河合綾子、木原佳

菜江、金　聡希、公望聡史、清水三千香、杉万俊夫、高橋良彰、田名場美雪、千葉知美、テー　シャオブン、永岡理香、平井一弘、松岡依里子、三宅一郎、三好昭子、四関安夫、李　博慧、蕨岡幸一

■所属変更

森上幸夫（大阪国際大学）、佐々木真哉（株式会社青山学芸心理）、田中宏二（岡山大学エグゼクティブアドバイザー（非常勤））、渋谷和彦（統計数理研究所研究員）、谷田林士（大正大学人間学部専任講師）、西田公昭（立正大学心理学部教授）、文野　洋（文京学院大学人間学部）、三浦彩美（武庫川女子大学文学部心理・社会福祉学科専任講師）、鈴木勇（甲子園大学心理学部専任講師）、上野啓子（(株)インタービスタ）、村田雅之（東京工芸大学芸術学部デザイン学科）、宇井美代子（玉川大学文学部人間学科）、森　祐治（株式会社電通コンサルティング取締役・ディレクター）、熊谷伸子（文化学園大学服装学部服装社会学研究室）、小笠原盛浩（関西大学社会学部准教授）、堀毛一也（東洋大学社会学部社会心理学科）、栗田喜勝（吉備国際大学心理学部子ども発達教育学科）、水野邦夫（帝塚山大学心理学部心理学科）、前田洋枝（南山大学総合政策学部総合政策学科講師）、辻　幸恵（神戸国際大学経済学部都市環境・観光学科）、金政祐司（追手門学院大学心理学部心理学科准教授）、今井芳昭（慶應義塾大学文学部）、渡辺久哲（上智大学文学部新聞学科）、倉澤寿之（白梅学園大学子ども学部）、元吉忠寛（関西大学社会安全学部准教授）、高橋直樹（新潟医療福祉大学医療経営管理学部医療情報管理学科）、岡本　香（東京福祉大学心理学部専任講師）、矢野宏光（高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門准教授）、河村真千子（東京大学大学院経済学研究科特任研究員）、安部幸志（国立長寿医療センター研究所長寿政策科学研究部）、守　一雄（東京農工大学大学院工学研究院）、大嶽さと子（浜松医科大学子どものこころの発達研究センター特任助教）、塚原拓馬（実践女子大学生活文化学科）、村山　綾（関西学院大学大学院文学研究科応用心理科学研究センター）、諸上茂光（法政大学社会学部）、森泉　哲（南山大学短期大学部）、前村奈央佳（琉球大学法文学部非常勤(PD)研究員）、家島明彦（島根大学キャリアセンター講師）、尾関美喜（早稲田大学人間科学学術院助教）、薊　理津子（聖心女子大学特別研究員）、三船恒裕（日本学術振興会特別研究員・神戸大学）、小松さくら（フリンダース大学・同志社大学大学院心理学研究科・日本学術振興会特別研究員(PD)）、高岸治人（東京大学大学院医学系研究科脳神経医学専攻特別研究員）、桂(赤坂)瑠以（お茶の水女子大学学生支援センター講師）、下田俊介（東洋大学21 世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター研究支援者）、木村玲欧（兵庫県立大学環境人間学部）、松本みゆき（名古屋大学評価企画室技術職員）、堀田結孝（上智大学総合人間科学部 PD 研究員）、柳澤邦昭（日本学術振興会・広島大学）、土屋耕治（南山大学人文学部心理人間学科講師）、羽鳥剛史（愛媛大学大学院理工学研究科生産環境工学専攻准教授）、北村　智（東京経済大学コミュニケーション学部）、川上直秋（日本学術振興会特別研究員・筑波大学）、澤邉　潤（新潟大学教育・学生支援機構特任助教）、萩原　遥（西東京市教育委員会教育支援課）、吉田　達（新潟大学人文学部助教）、縄田健悟（日本学術振興会特別研究員(PD)・九州大学）、佐々木香織（株式会社 NTT データスミスマーケティングリサーチ事業部企画分析部）、川嶋健太郎（尚絅大学短期大学部総合生活学科准教授）、野口友希（株式会社ボーダーズ）、田中千絵（株式会社インテージ）、高本真寛（筑波大学）、小山祥明（健康保険組合連合会東京連合会総務課長）、井川純一（広島医療保健専門学校精神保健福祉学科専任教員）、蒲池和明（神奈川県立こども医療センター臨床心理室）、田坂麻紘（名古屋大学大学院環境学研究科）、有賀敦紀（立正大学心理学部講師）、鬼頭(桂川)美江（Department of Psychology, University of Winnipeg Postdoctoral Fellow）

編集後記

今号から担当させていただく、池田と范です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

二人していきなりぷはー、と一杯飲みたい気分、なんていうのは、池田の独り言です。会報だけが主な広報手段だった頃、なんていうと古き良き時代をけなすようになってよろしくないですが、少なくとも自分が以前に担当した「良き時代(？)」より何倍かの活動が広報委員会で行われています。会報、学会ホームページ、メールニュース、そして震災特設ページです。それに比例するだけ学会内への発信、社会への発信が活発になれるように、アルコールをバイオエネルギーとして活用するっきゃないですね。

なお、学会のホームページも下記のように移動しておりますので、ご注意ください。このサイトのリニューアルも、近々実現の予定です。乞うご期待！　前委員長の川浦さんに感謝です。http://www.socialpsychology.jp/